よみがえる文化財

美術品修復の現場から

強烈な太陽が生んだ色彩

□■9

吉備国際大教授
下山　進氏

日本では、5世紀ごろに植物の根や葉を煮出した液に繊維を漬けて染める「浸染」の技法が大陸（中国）から伝来し、604年には、色そのもので位（序列）を表すことになります（冠位十二階）。この頃に日本の染色技術が完成したと思われます。その後、平安時代になって編纂された「延喜式（927年）」の中で古代の色彩名とそれを染めだす染料が定められます。

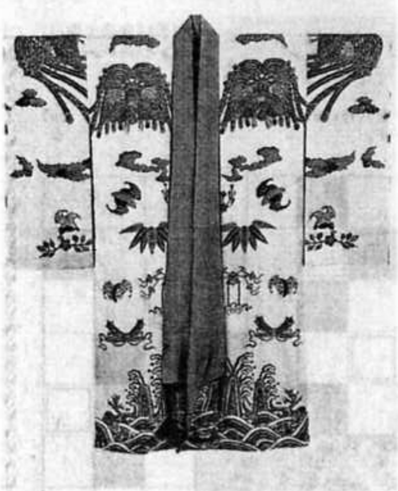
この延喜式にある染料は、すべて植物で、紅花、蘇芳、茜、紫草、支子、刈安、黄檗、櫨、藍、搗橡（樫の木などのドングリの実）の10種類です。一つの染料で濃淡を染めだすだけでなく、赤色の染料と黄色の染料で橙色から真っ赤な緋色まで、また黄色の染料と青の染料で緑を染める「重ね染め（交染）」の技法によって多彩な色を染めだしていたのです。

◆林原美術館の緑

林原美術館は、本邦最高のコレクションに属する桃山時代の貴重な能装束を収蔵しています。その中で重要文化財の「菊橘文縫箔」には、緑に染めた糸で四季の草花の葉を刺繍で表しています。

この分析調査の結果は、黄檗の黄色染料と藍の青の染料を重ねて染めたものでした。このように、古代の染色技法は、平安時代から安土桃山時代を経て江戸時代へと伝承され、日本の伝統的な染めは植物染料によるものとされてきました。

しかし、琉球（沖縄）の染めは意外なものでした。


黄色地の紅型衣裳（那覇市所蔵、重要文化財）

◆琉球の紅型衣裳

琉球国が終焉した1879（明治12）年から116年たった1995年、東京に住む琉球王家の二十二代当主尚裕氏から同家が継承してきた古文書や美術工芸品が那覇市に寄贈されます。太平洋戦争で多くの文化財を失ってしまった沖縄に琉球の文化を象徴する品々が帰ってきたのです。

この美術工芸品の中に琉球文化の質の高さを端的に現す鮮やかな色彩と大胆な図柄で構成された「紅型衣裳（18～19世紀）」が含まれていました。紅型は、糊を防染材にして文様を染めだす染色技法で、「型染め」の一種です。制作された当時は、「型付（方言でカタチキー）」と呼ばれたもので、大正末期ごろから紅型と言われるようになりました。

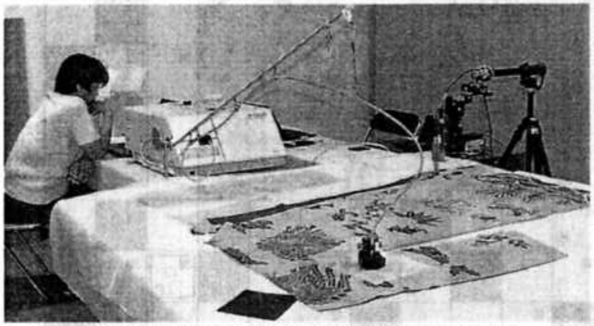
◆紅型の染めに顔料

那覇市は、文化庁の国庫補助を受けて98年から5カ年間の「尚家関係資料総合調査事業」を開始します。私たちは、この調査事業の特別調査委員として、01年9月に第一次調査を、02年9月に第二次調査を行いました。染料を指紋でとらえる三次元蛍光スペクトル非破壊分析装置と、顔料を構成している元素を判定するラジオアイソトープを利用したポータブル蛍光X線非破壊分析装置の両方を設置して調査にあたったのです。

まず、琉球王家の色は黄色です。そこで、黄色地の紅型衣裳から調査に取り掛かりました。沖縄では、植物の「福木」を用いて黄色に染めることから、紅型の地色も同じように福木で染めたものと思われていました。

しかし、意外にも重要文化財に指定された「黄色地鳳凰蝙蝠宝尽青海立波文様紅型綾（絹）袷衣裳」をはじめとして、10点ある鮮やかな黄色地の紅型衣裳のうち、8点からヒ素が検出されたのです。この8点の黄色地には、中国から輸入されたであろう無機顔料の「石黄（硫化ヒ素を主成分とする顔料）」が使われていることが分かりました。

この耐光性をもつ黄色の顔料染めは、植物から得られる染料では退色しやすい沖縄の強烈な太陽の下で生み出されたものでした。


琉球紅型の調査現場に設置した三次元蛍光スペクトル非破壊分析装置（左）と蛍光X線非破壊分析装置（右）

林原美術館の調査現場で光ファイバーの先端を能装束の測定部にセットする筆者（左）

きび談語

遅めの夏休みで、インドを旅してきました。人と牛と車でごった返し、エアコン付きの車に乗る人もいれば、路上で喜捨を求める人もいて、すべてが喧騒の中にありました▲ベナレスというガンジス河のほとりのヒンドゥー教の聖地では、巡礼者に交じり私もガンジスでもく浴。近くの火葬場では遺体が焼かれ、遺灰も流される母なる河。雄大な流れが生死の激しい対比を包み込んでいました▲この町にある施設では身寄りのない人などを、身分、宗教にかかわらず、無償でお世話しています。シスターは「みな神の子です」。貧富、生死、宗教、混とん。すべてを飲み込むインド。日本に比べ問題は多いでしょうが、日本にない熱も感じました。【若狭幸治】